

M-GTAを用いた大学生による介護等体験の経験プロセスの質的分析

前田 賢輔*・鎌野 育代**

Kensuke MAEDA・Ikuyo KAMANO

Experience Process for “Care Experience” by University Student: A Qualitative Analysis Using M-GTA

ABSTRACT

本研究では、介護等体験に対してプラスイメージを持った学生が、そのイメージを持つに至った経験プロセスを明らかにすることを目的とする。研究方法は、対象を介護等体験に対してプラスイメージを持った学生に限定しインタビューを行い、その経験プロセスを、M-GTAを用いて明らかにした。結果、介護等体験にプラスのイメージを持った大学生は、＜居場所の所在＞を確認することで、心身共に安心して緊張から解放され、自身の能力を十分に発揮して＜能動的な体験活動＞ができるようになり、関係性をさらに発展させた＜相互に信頼し合える関係＞を築くことができるようになる。そしてこれらには、“職員による実習生への言葉かけ”があることで、学生が生き生きと体験できるようになったといった経験プロセスを捉えることができた。

今後の課題としては、＜相互に信頼し合える関係＞につながる受け身から能動的な活動への移行の背後にあるものを明らかにすること、介護等体験に対してマイナスのイメージを持った学生の語りにも注目し、この体験の経験プロセスの全体像を捉える研究をすることである。

【キーワード：大学生 介護等体験 プラスイメージ M-GTA】

1. 問題の所在と研究の目的

介護等体験は、1997年に成立した「小学校及び中学校の教諭の普通免許状授与に関わる教育職員免許法の特例等に関する法律（介護等体験特例法）」文部科学省（2011）¹に基づき、平成10年度の大学入学者から適用されるようになった、小学校及び中学校教諭の普通免許取得希望者に義務付けられている制度である。

文部科学省（2011）¹は、介護等体験について、平成9年介護等体験特例法の概要で、「教員が個人の尊厳及び社会連帯の理念に関する認識を深めることの重要性にかんがみ教員の資質向上及び学校教育の一層の充実を図る観点から、当面、小学校及び中学校の教諭の普通免許状取得希望者に、介護等体験をさせる」としている。

介護等体験の意義として齋藤ら（2002）²は、【福祉ニーズを持つ人々の存在に気づく】、【人々の多様な価値観に触れる】、【個人の尊厳を学ぶ】、【コミュニケーションの多様性への気づき】に分けられるとしている。また、浪本（2014）³は、介護等体験をおこなう学生の立場から見ると、わずか7日間ながらも、それを契機にして、弱者への人権意識をどれだけ高められるか、ノーマライゼーションやインクルージョンの思想などをどの程度受容できるか、相手との共感的・受容的人間関係という観点からどのくらい成長できるか、新しい教師像をどれだけ模索できるかなどが、ポイントとなると述べている。さらに、萩野（2016）⁴は、介護等体験を終えた大学生の振り返りレポートから、【人の接し方についての学び】や、【教師としての資質向上】、【人間としての成長】といった教育的効果があるとしている。これら

の研究知見は、介護等体験を終えた大学生の経験をトータルに捉えた優れた研究であるが、大学生の介護等体験における多様で複雑な心の動きを、人との相互関係や経験プロセスという視点からは明らかにされていない。

そこで、本研究では介護等体験に対してプラスイメージを持った学生を対象に限定し、経験プロセスを明らかにすることを目的とする。なお、今回、介護等体験に対してプラスイメージを持った学生を対象にした理由は、介護等体験の意義、目的を鑑みると、どんな学生にとっても有意義なものになるように支援する必要がある、本研究は学生を受け入れる側の事前学習等の指導に役立つ知見を得ることができると考えたからである。一方で、プラスイメージを持つ学生に限定したことにより、介護等体験の全体像を捉えることにはならないが、これから介護等体験を経験する学生が積極的に参加できるためのデータとなることを期待する。よって、今回は、介護等体験に対してプラスのイメージをもった学生に限定し、その詳細な経験プロセスを明らかにする。

2. 方法

2-1 なぜ、M-GTAを用いたか

様々な要因が複合的に関連し合い、経験内容の個人差が大きいと考えられる介護等体験での学生の学びや経験を質的に捉えるためには、学生から語られた言葉の深い解釈をもとに明らかにすることが重要である。

そこで、本研究では、質的研究アプローチを採用し、その中でも、グラウンテッド・セオリー・アプローチ（GTA）に木下（2003）⁵独自の修正を加えた修正版グ

* 神奈川県立あおば支援学校

** 島根大学教育学部小学校教育専攻

ラウンテッド・セオリーアプローチ (M-GTA) を用いて分析する。このM-GTAの特徴について、考案者の木下は、データの中に表現されたコンテキストの理解を重視することから、データの切片化は行わないとしている。このM-GTAを用いた分析を行うことで、ディティールの豊富な質的データのコンテキストを破壊することなく、人間と人間の複雑な相互作用をプロセスとして読み取ることが可能となる。本研究では、介護等体験を終えた学生の中から、図1に示すアンケートにより、「あなたにとって、介護等体験は有意義なものでしたか？1つに○をつけてください」の問いに対して「とてもそう思う」や「そう思う」といった回答や、介護等体験に対しての楽しさや充実さといった感想を具体的に記入したものを抽出し、インタビューを行った。

介護等体験に関するアンケート
初等教育開発専攻に所属する前田賢輔です。
私は今、卒業論文において大学生にとっての介護等体験などのような効果があるのか、そのプロセスに
焦点を当てて研究したいと考えています。そこで、インタビュー対象者を抽出する目的でアンケートの実
施をお願いします。以下の項目にお答えください。

学 籍 番 号	氏 名
メールアドレス	

○あなたにとって、介護等体験は有意義なものでしたか？1つに○をつけてください。
とてもそう思う ———— そう思う ———— あまりそうは思わない ———— そう思わない

○介護等体験で新たな発見があった人は具体的に書いてください。

ご協力ありがとうございます。

図1 介護等体験に関するアンケート

2-2 研究対象とデータ収集

本研究ではまず、2019年度国立大学法人S大学に在籍する介護等体験を終えた学生（53名）に対し、アンケート調査を行った（図1）。内容としては、介護等体験の感想で、インタビューに応じてよい場合のメールアドレスの記入も求めた。アンケートの回収後、介護等体験に対してプラスの感想とメールアドレスの記入があった学生10名を抽出して連絡をとった。こうしてインタビューへの協力を申し出てくれた学生（以下、対象者）10名との連絡調整後、大学の学生研究室において30分～1時間程度の時間のなかで、介護等体験の感想や気付きを自由に語ってもらう形でインタビューを行った。その際に、インタビュー内容を記述するとともにICレコーダーで録音を行った。その後、筆者がトランスクリプトに起こし、データとした。なお、グランテッド・セオリーとは人間の行動や他者との社会的相互作用の説明や予測に有効な理論であり、本研究の分析テーマを「介護等体験活動にプラスのイメージをもった学生の経験プロセス」とした。

2-3 分析方法の概略

分析の手順としては、インタビュー→トランスクリプト作成→分析テーマの作成→概念生成⇄カテゴリー生成→結果図の作成である。但し、概念生成とカテゴリー生成については、双方向の活動であり、それぞれ修正をし

ながら進めていった。はじめに修正版M-GTAでは、分析テーマに迫る多様な具体例がありそうな語りの多い一人分のデータから分析テーマに沿って着目した箇所を分析ワークシート（表1）の具体例欄に記入した。これについて、木下（2003）⁵ は修正版M-GTAでは、最初の概念生成が最も重要であり、最初の概念を生成する作業にこの方法の主要な要素が凝縮されているとしている。次に他のデータについても具体例がないか検討し、類似例があれば具体例欄に加えた。また、他のデータを繰り返し、目を通す中で、概念が生成されれば、随時分析ワークシートを作成し、同じく類似例があれば加える作業を繰り返した。M-GTAでは、データの切片化をしないことが特徴であり、一人の語りにはいくつもの具体例が存在し、複数の分析ワークシートに具体例として記されることもある。なお、本研究の分析においては、概念として生成するための具体例の数は3程度とした。また、具体例が3以下の場合には他の概念に統合できないかどうかを確認し、できない場合は、その概念は有効ではないと判断した。さらに、M-GTAでは、類似例と対極例と比較分析をすることで精緻化が進むとされているが、本分析において、対極例を見出すことはできなかった。

分析ワークシートの具体例を繰り返し読む中で、浮かび上がってくる共通性や分析対象者にとっての経験の流れを読み取り、その意味を解釈したものを定義とした。そして、この具体例と定義からこの経験を最も的確に表現できる言葉を、概念名とした。

このような比較分析を継続して行い、解釈、定義、概念名がデータに密着しているかどうかを検討（grounded on data）（木下 2003）⁵ し、必要に応じた定義と概念名に修正を加えた。このように複数の概念名の間の関係性を吟味しながら、カテゴリーを生成し収束化し、概念やカテゴリー相互の関係から分析結果をまとめ、その概要を簡潔に文章化し、結果図を作成した。以上のように、M-GTAの考案者である木下（2003）⁵ の分析方法に依拠し、分析を進めた。

概念生成から結果図の作成等の分析においては、質的研究の熟達者より適宜アドバイスを受け、説得了解性を高めるための検討を重ねた。

3. 結果及び考察

M-GTAは、質的データの解釈をしながら分析を進めるため、結果と考察を分けて論じることは困難であり、以下に結果と考察をまとめて論じる。図2は、データから概念を生成し、最終的に複数の概念間の関係を図で示したものであり、分析の結果図である。これより、分析の手順に沿い、概念生成→カテゴリー生成→ストーリーラインの順で報告する。なお、ストーリーラインとは分析結果を、生成した概念とカテゴリーだけで簡潔に、文章化したものである。

3-1 概念生成

概念の生成過程の一例を示す。まず、次のインタビュー内容に注目した。

認知症の方と関わる時は、ずっと同じ話をされることがあるんですけど、なるべく初見の反応でリアクションは取ってましたね。でもたまに聞くだけだと本当にしんどいので、自分の経験とか相談みたいな感じで入れたら割と親身に乘ってくれるので、やっぱりそういうのがあるとまだ楽しくなるんじゃないかなと思いました。(M. R.)

また、類似例としては、

お年寄り同士だと話せない話とか、孫の話とか、なんかこの自分の年代だったから余計に話したいっていう気持ちを持って話してくれたなあとと思うので、なんかそれが良かったなあって思います。(M. S.)

というデータがあった。このように学生は、体験の中で、利用者・児童・生徒の語りを聞き、相手の気持ちに寄り添った発言や対応をしていたり、また、彼らが語る姿から、心を開いてくれていると感じていたりすることがわかる。さらに (Y. M.) は、それ以降の利用者との関わりについて、以下のように語っている。

あと、なんかその、いつもはこういう活動をしないけど、自分が来たことによって「こういうのもしてみようかな？」っていうお年寄りの方がおられて。なんかいつもは部屋にこもっちゃうけど、こう、「行ってみませんか？」っていう声掛けをしたら、一緒に活動をしてくださった方がいたので、なんかどんどん心開いてくれる感じが嬉しかったです。(Y. M.)

これらから学生は、利用者・児童・生徒の語りに気持ちに寄り添い、やさしく言葉をかけながら共に時間を過ごしていることがわかる。また学生の関わりにより、利用者・児童・生徒の心を開き、前向きな行動を促しており、“利用者・児童・生徒の心情の変化や成長に関わる体験”という概念名を生成した。

3-2 カテゴリー生成

以上のような手法と手順で概念を生成するとともに、同時に、複数の概念間の相互関係を検討し、カテゴリーを生成した。その結果、3つのカテゴリー、5つのサブカテゴリー、13の概念が生成された。(表2) “ ” 内に「概念」を、[] 内に「サブカテゴリー」を、< > 内に「カテゴリー」として示している。以下にその一例を示す。

[空間の居心地の良さ]

“きれいな場所”という概念を生成する中で、この概

念につながるサブカテゴリーが存在すると思った。それが、[空間の居心地の良さ]というサブカテゴリーである。このサブカテゴリーを構成するのは、“きれいな場所”と“和気藹々とした雰囲気”の2つの概念である。

この、“きれいな場所”について学生は、その印象の良さについて語っている。その記述を以下に示す。

はい、建物は大規模ですね。めっちゃあるんですよ建物が。私、五日間を三つに分けて三つの棟に行ったんですけど。(O. S.)

建物が綺麗。で、新しいんじゃないかな、割と。(T. Y.)

建物は清潔な印象でした。どこにでも消毒が置いてあるし、消毒のにおいがしてました。(M. R.)

また、“和気藹々とした雰囲気”については、以下のように語っている。

なんか、その、おじいちゃんおばあちゃんたちが、例えば、寝てる間とかでも、割と職員同士が和気藹々としてて、僕も居やすかったですね、その空間。すごく。(T. Y.)

雰囲気がめっちゃ良かったです。職員の方同士もコミュニケーションがすごい取れてて。他の施設見てないので比べられないですけど結構明るい職員さんが多かったです。(O. S.)

雰囲気は、結構話しかけてくれる方が多くて、職員さんとかが、なんかよく面倒見てくれたなあって思います。良い雰囲気でした。(Y. M.)

以上の、“きれいな場所”と“和気藹々とした雰囲気”の概念からは、その空間にいることへの身体と心の安心感が得られているといった共通項があると捉え、[空間の居心地の良さ]というサブカテゴリーでまとめた。

[安心できる場所]

このように、介護等体験を通してプラスのイメージを持った学生は、[空間の居心地の良さ]から活動がしやすくなったと考えられる。さらに、学生が客観的に捉えた空間の満足感以外にも、対人関係の中に居場所を感じ取る概念があると、インタビュー内容から推測した。それが、“職員と仲良くなれた”、“交流を楽しむことができる”、“話しかけてもらったうれしさ”の3つの概念であり、それをまとめた[安心できる場所]というサブカテゴリーがあると捉えた。以下に概念を構成する記述の一部を示す。

“職員と仲良くなれた”

昼ご飯は控室みたいところで他の職員さんたちと食べるんですけど、その時に、まあ、僕は基本会話に入らないようにしてたんですけど、職員同士の会話には。なんか、偶に話を振られるんですけど、なんか、褒められることが多かったんですよ、僕。(T. Y.)

顔見知りくらいの後輩のそのお母さんが働いておられて、まあその人と割と話しましたね。あと、自分のお母さんと同じ職場だった人がいたりとかで、結構あったので縁が。(K. M.)

“交流を楽しむことができる”

オセロとかしたんですけど、なんか気を遣う試合とかもあったんですけど、本当に強い人とかがいてその普通にオセロを楽しめたと言うか。気を遣わずに自分も本気でやって負けるとか全然あって、やっぱりそういうのは楽しいなって思いましたね。(K. M.)

折り紙とか教えてもらったり、一緒にオセロやったり、なんかギターを弾く人がいて、その話をしたり、あの時間が一番楽しかったです。昔話聞いたりとか。すごい楽しいです。(T. S.)

“話しかけてもらったうれしさ”

「将来悩んでるんですよー」とか「こういうことしたいんですよ」みたいなのちょっとぼそっと話すと、割と親身に相談に乗ってくれると言うか。男の人だったんで、「こうしろ」と男らしく言うてくださったので、そこはまあ勉強にもなりました。(K. M.)

最後利用者さんにいろいろ貰いましたね。なんか手作りの人形みたいなものとか。木で作られた謎の人形を貰ったり。創作の時間は多かったです。木の人形をくれた人は、昔は木でつくる人形職人だった人で、「これをお前にやる」みたいな。(S. Y.)

このように、職員や利用者・児童・生徒と良いと思えるような交流を育むことができたことにより、体験のプラスイメージにつながっていると捉えた。これより、体験を通して学生は、職員や利用者・児童・生徒との関係

の中で、自身を受容してくれる場であることに安心し、体験を行うことができたとし、[安心できる場所] というサブカテゴリーを生成した。

<居場所の所在>

上記に関連した概念として、“体験に過度の期待を抱いていない”が挙げられる。以下に概念を構成する記述の一部を示す。

どちらの施設にしても、気楽に構えてて、自分の中にある介護等体験への期待感がめちゃくちゃ高いわけではなかったし、自分にはきっとこういうことができるんじゃないかといった期待を持って行ったわけではないので、自分はそれなりにできることをやってみようという気持ちで、楽しく過ごすことができました。(Y. M.)

楽しかったですね。逆に言えばつらい面はあまり見られなかったというか。結構よいところを知れたかなあと。やりがいのある仕事だなあとというのは感じましたね。行く前はびびってたというか。何させられるんだろうなあみたいな感じで分からなかった。(S. Y.)

これらの学生は、体験に対して、自らや施設・学校に対しての過度の期待や、先入観による気負いをしておらず、ありのままの自分で体験に臨んでいる。結果として、それが純粋に体験内容を受け入れることにつながったと捉え、“体験に過度の期待を抱いていない”という概念を生成した。

以上の[空間の居心地の良さ]、[安心できる場所]の2つのサブカテゴリーに加え、“体験に過度の期待を抱いていない”の概念のそれぞれに共通性があることを見出し、<居場所の所在>というカテゴリーを生成した。

表1 分析ワークシート例

概念名	和気藹々とした雰囲気
定義	職員同士や利用者・児童生徒といったその場にいる人々が楽しい雰囲気で話し合ったりコミュニケーションをとったりしている。
具体例	(T.Y.) なんか、その、おじいちゃんおばあちゃんたちが、例えば、寝てる間とかでも、割と職員同士が和気藹々としてて、僕も居やすかったですね、その空間。すごく。 (O.S.) 雰囲気がめっちゃ良かったです。職員の方同士もコミュニケーションがすごい取れてて。他の施設見てないので比べられないですけど結構明るい職員さんが多かったです。 (Y.M) 雰囲気は、結構話しかけてくれる方が多くて、職員さんとかが、なんかよく面倒見てくれたなって思います。良い雰囲気でした。
論理的メモ	・施設や学校の人々の雰囲気が良いことで、体験としてやってきた学生の緊張がほぐれ、安心し、その空間に居心地の良さを感じている。 ・話しかけてもらったり、楽しい雰囲気を感じて、「自分はここにいても良いんだ」という安心感を得ている。

表2 カテゴリー別概念生成

番号	概念	サブカテゴリー	カテゴリー
13	職員による温かい言葉かけ		
12	体験に過度の期待を抱いていない		居場所の所在
4	きれいな場所	空間の居心地の良さ	
9	和気藹々とした雰囲気		
3	職員と仲良くなれた	安心できる場所	
11	話しかけてもらったうれしさ		
10	交流を楽しむことができる		
2	体験に役立つ知識がある	積極的な態度	
6	自分の得意なことを生かして交流できた		
1	相手の気持ちに寄り添って過ごす		
5	心の通い合うやりとり	深いコミュニケーション	相互に信頼し合える関係
8	関わりの困難を乗り越える		
7	利用者・児童・生徒の心情の変化や成長に関わる体験	相手に働きかける	

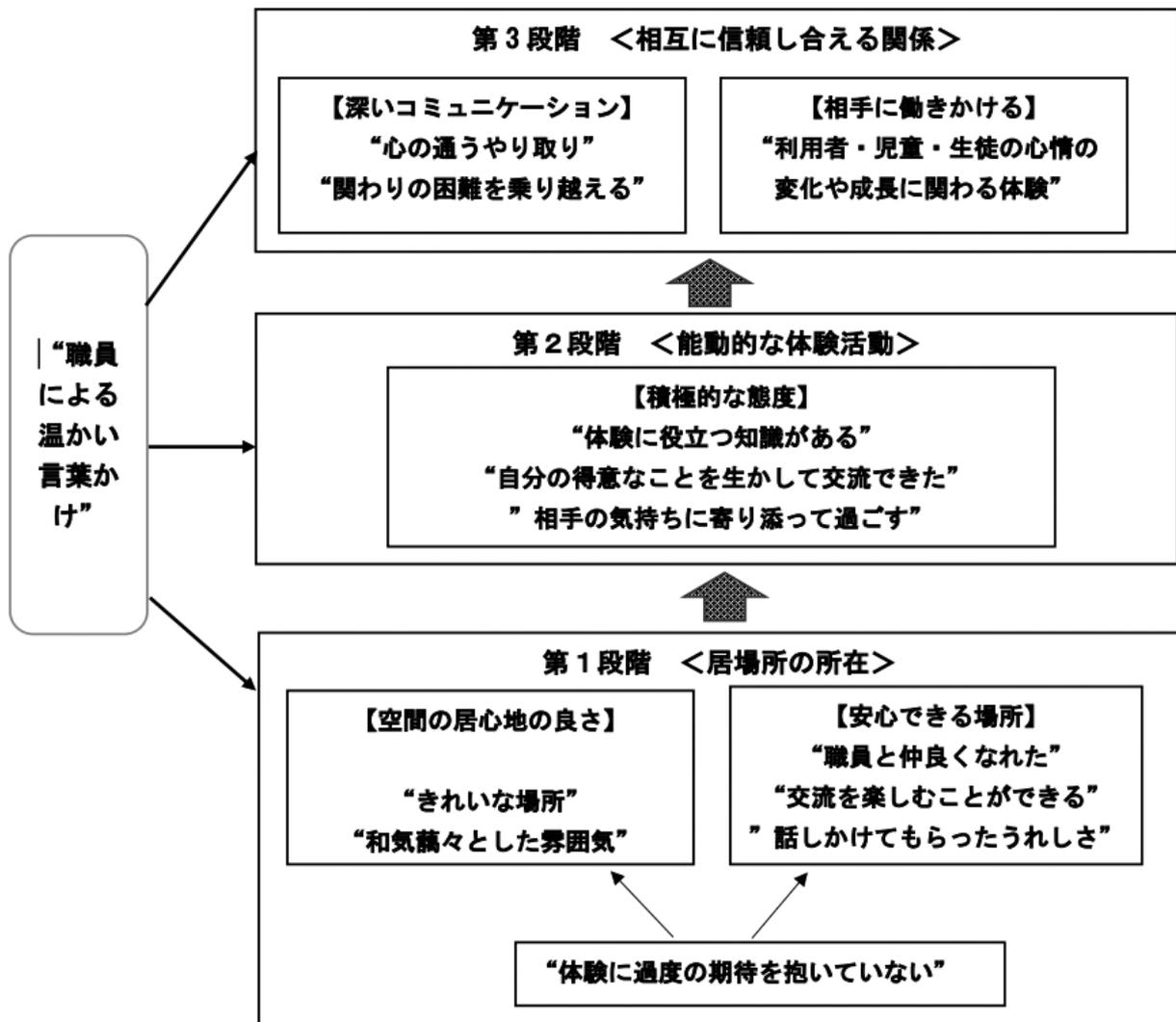


図2 概念図

3-3 結果図

分析の結果として、概念、サブカテゴリー、カテゴリーの相互の関係を示したものが以下の概念図（図2）である。

3-4 ストーリーライン

介護等体験に対してプラスイメージを持った学生は、“体験に過度の期待を抱いていない”状態で体験に臨みそれにより、純粋に体験内容を受け入れることができている。体験が始まると、まず、＜居場所の所在＞を確認することで、心身共に安心して体験を行うことができている。＜居場所の所在＞には、施設・学校を客観的に捉えた「空間の居心地の良さ」と、主観的な人間関係の中で捉えた「安心できる場所」があり、先に挙げた“体験に過度の期待を抱いていない”ことも、＜居場所の所在＞を確認するのに必要であると捉えた。学生は“きれいな場所”や“和気藹々とした雰囲気”から、心身ともに安心できる場所に落ち着いているという「空間の居心地の良さ」を感じており、“職員と仲良くなれた”ことや、“話しかけてもらったうれしさ”といった相手主体のコミュニケーションが成立した後、“交流を楽しむことができる”というように、体験活動を通して緊張から解放され、楽しさを感じていることから、「安心できる場所」であると認識している。

体験が進むと、学生は、“体験に役立つ知識がある”ことや、“自分の得意なことを生かして交流できた”こと、“相手の気持ちに寄り添って共に過ごす”姿といった、「積極的な態度」が見られるようになる。＜居場所の所在＞により、緊張感から解放されたことで、自身の能力を十分に発揮できるようになる＜能動的な体験活動＞により、多くの学びや充実感を得られている。

さらに体験の時間が進むと、学生は、“心の通い合うやりとり”を感じ、“関わりの困難を乗り越える”体験から、利用者・児童・生徒との「深いコミュニケーション」ができるようになっていく。そして、“利用者・児童・生徒の心情の変化や成長に関わる体験”のような、「相手に働きかける」行動や関わりができるようになるのである。これらより、学生と利用者・児童・生徒の間に＜相互に信頼し合える関係＞が生まれている。

以上より、学生の体験から、＜居場所の所在＞を得た後に、＜能動的な体験活動＞ができるようになり、さらに発展した＜相互に信頼し合える関係＞を形成するプロセスがあると捉えた。また、“職員による実習生への言葉かけ”があることで、学生が安心感や自己肯定感を持って体験に臨むことができたり、新たな発見を得ることがあったりと、これらのプロセスの全てに関わっているものであると捉えている。

3-5 まとめ

介護等体験においてプラスのイメージをもった大学生は体験先において、どのような経験からプラスのイメージに至ったのか、質的研究方法としてM-GTAを用いて

明らかとなったことを以下のようにまとめた。

- ① 大学生は、＜居場所の所在＞から始め、＜能動的な体験活動＞をすることで、＜相互に信頼し合える関係＞に至ることで、大学生はプラスのイメージを持つことにつながる。
- ② 大学生の介護等体験をプラスに促進するものは、＜職員による温かい言葉かけ＞であり、学生は職員からの何気ない言葉かけが大きく影響することが捉えられた。
- ③ 介護等体験をプラスにつなげている大学生は、人との相互関係において、徐々に受け身の活動から能動的な活動に移行できている学生である。

まず、①については、大学生の主体性が重要であるといえる。つまり、体験活動に対しての期待感などを持つことなく、自然体で臨み、活動を受け入れるなかで、徐々に自ら働きかける活動に移行していることが重要であると考えられる。これは、介護等体験を意味のある活動にするためにも大学生に対して、何かしら自分で考え主体的に行動してみることを促すことが示唆されたと考えられる。②の結果は、大学生を受け入れる側として、職員の言葉かけが非常に重要であり、大学生の介護等体験に大きく影響するということである。このことは、介護等体験に影響を与える要因は、人との相互関係であり、受け入れ側の施設の職員は、多忙であったとしても、実習として活動する大学生に対して何かしら声をかけてくださることが、非常に重要であるということがいえる。③の受け身から能動的な活動への移行のきっかけとなるものは、学生のコミュニケーション能力の差や、体験先の施設・学校の環境により、個人差があることが読み取れた。きっかけとして挙げられるものは、職員の姿から影響を受ける場合、規制のない自由な活動が許されていることがきっかけとなる場合などがあった。

4. 今後の課題

今後の課題の一つ目としては、＜相互に信頼し合える関係＞につながる受け身から能動的な活動への移行の背後にあるものを明らかにすることである。それが、人との関係性であるのか、環境や空間であるのか、また学生の特性によるものなのか、これらを明らかにすることである。また、本研究の結果は一大学の学生を対象とした限定されたものである。他の大学生についても検討する必要がある。二つ目としては、介護等体験に対してマイナスのイメージを持った学生の語りにも注目し、この体験の経験プロセスの全体像を捉える研究をすることである。この研究に取り組むことで、大学生の介護等体験の全体像が明らかになるとともにこの実習をさらに充実させるための要素を明らかにできるものと考えられる。

【参考文献】

¹文部科学省（2011）「特別支援教育の在り方に関する特別委員会（第14回）資料1-3：平成9年介護等体験特例法の概要」

² 齋藤友介・坂野純子・松浦孝明・中嶋和夫（編）
（2002）「チャレンジ 介護等体験 共生社会における障害
理解のエッセンス」ナカニシヤ出版 p.2、p.3
³ 現代教師養成研究会（編）（2014）「四訂版 教師をめ
ざす人の介護等体験ハンドブック」大修館書店 p.18

⁴ 萩野佳代子（2016）「介護等体験からの『学び』」神奈
川大学心理・教育研究論集 第39号
⁵ 木下康仁（2003）「グラウンテッド・セオリー・アプ
ローチの実践 質的研究への誘い」弘文堂